

No.2910

社会資本としての宗教祭礼に関する計量経済学的検討

～インド・ラージャスターン州儀礼演劇ガウリを例として～

日本学術振興会特別研究員

迫田さやか

(同志社大学経済学部助教時の研究)

本調査研究の目的は、インド西部ラージャスターン州の指定部族ビール(Bhil)による伝統的な儀礼演劇ガウリ(Gavari)を調査対象として取り上げ、文化多様性や共同体における固有の文化が個人の幸福や地域全体の経済的・社会的厚生に対して持つ含意について明らかにすることである。本研究は、共同体における固有の文化が個人の幸福や地域全体の社会的厚生に対して持つ含意を分析する文化人類学的な取り組みについて、ランダム化対照試験による実証分析という開発経済学的手法を用いた研究として位置づけることが可能である。

SDGs においてもその重要性が認識されている文化多様性と経済発展は二律相反的な可能性がある。文化多様性の一つとして宗教を捉えるなら、宗教参加が経済発展にどのような影響をもたらすのかという「世俗化仮説」についてのマクロ的検証は行われていた。しかし、個人の消費・経済そして宗教行動が共同体の経済社会発展とどのような関係にあるのかを検証したマイクロデータによる実証分析研究、また、アジア地域が実証研究の対象となった研究はほとんどない。

本研究対象であるビールは、非ヒンディ・極貧状況という現代インドにおいての社会的にも経済的にもマイノリティである。ビールは、毎年8月に40日間掛けて、同郷の演じ手集団が集落を巡回して演劇を行うガウリと呼ばれる宗教的な儀礼演劇を行う。本研究調査では、踊り手と非踊り手に分けて、各1000サンプルサイズの調査を行った。これにより、ランダム化比較試験をしなくとも、トリートメント群である踊り手とコントロール群である非踊り手が生じているので、一見すれば経済的には合理性のない固有の文化が、個人の生活・厚生と共同体の経済社会発展にどのように影響を与えているのかを見ることができる。

本研究は、途上国の持つ「豊かさ」を明らかにするためだけではなく、我々の社会がこれから目指すべき「豊かさ」とは何であるのかを再考するものである。